

「及び」を衍入せざるを得なくなつたものである。一斑を以て全貌を推すとすると譯文を危ぶまざるを得なくもなるが、是れ必ず白璧の微瑕に過ぎなからう。僕の讀んだ所文では他は明晰暢達であつた。

此書の原本には索引が有つたが、本書では省いてある。然し本書の性質上から云へば何等かの索引は附してある方がよい。人名だけでも地名だけでもよいのだ。全然削除したのは如何かと思はれる。

参考文献の擧げ方は親切に譯してあるが、著書の刊行地年月迄譯したのはどうであらうか。此等は原文の儘の方が分り易い。又論文の出た雜誌名は原文の儘の方がよい。叢書名も同様だ。さうでないといふ混雜を生ずる恐れが少くない。而してそれも學界通用のものに近づけたかつたと思ふ。外務省も少くとも我學界と多少統制をとつてもいいではないか。

凡例の二にバルトリドの學歴を略叙してゐるが、既に故人であるから故人らしく書く必要がある。あれでは故人たるを知らない様に見える。僕が龍谷大學論叢に先生の弔傳を書いてからもう七八年にもなるんだ。あれは勿々の間に書いて委細を盡さない恨みがあるが

もう今の調査課なら何とか略傳位は卷頭に飾れたものと思ふんだ。

誤記か誤植かと思はれるものも二三目に觸れたが、大體に於て立派な印刷物で、流石官廳の出版物である。只官廳の出版物は由來一般の手に入り難い事が多い。そんな事は成るべく便宜にして一般に流傳させてほしいものだ。それが又出版の目的でもあらう。

Friedrich Weller,

Der gedruckte mongolische Kenjur
und die Leningrader Handschrift.

本論文はフリードリッヒ・ウエラア氏が獨逸東洋學會雜誌(ZDMG)一九三六年第九十卷(新編第十五卷)第二號に出だせるもので、その目的は蒙文甘珠爾の清朝殿板と露都鈔本との價值を證定するに存するも、據證する所は一にその收録する所の梵動經一本である。

然れ共爾來蒙文書誌學は極めて不備にして精細なる研究殆んどなきに拘らず、ウエラア氏の此論は微を究め幽を發し、小を推して大に至る。蒙文書誌學界に於ては空谷の聲と稱すべきもの、ウエラア氏の梵藏兩學

に於ける蘊蓄は幾多の論文によりて學界の周知する所進んで蒙文經典を參訂するに至る。その精進驚歎すべきである。佛教學界の感謝すべき業績たるのみならず蒙古學界も亦當に此の寄與に敬意を表すべきである。

余は人の請ふ儘に本論文の梗概を摘記するが、遺憾とする所はウエラ氏の校刊せる藏蒙文梵網經及びアジヤ・マヨル誌上の同經叙論を通讀せざる事である。本論文の據る所を知らずして之が要を提起するの無謀を試むるも亦已むを得ざるものがあるからである。著者並に讀者に罪を得るもの蓋し多き次第である。

著者は梵網經蒙文兩本即ち殿板及び露都鈔本を精細に比較校合し之を西藏文本に證して推論してゐる。露本に闕きて殿本に存する所の藏本に存するあるは是れ露本の佚脱にして殿本より新しき情態なりと云ふべく、又露本の闕くる所の或る藏本には同じく闕くるものあれば、殿板の露本より出でたるに非ざるは言ふ迄もない。是れ其一。又露本藏本に共に存して殿板のみ闕くは殿板の佚脱なるも、兩蒙本の異同の藏本の寫訛に歸すべきものあるは蓋し露本の殿板より出でたるものでないからである。是れ其二。兩蒙本互に此れ彼れ

より出たるに非れば相關係せざる兩本である。是れ其三。然れ共兩蒙本に共通せる誤にして藏本に合せざるもの、又兩蒙本共通の誤の藏本の誤に歸すべきものあり。即ち兩蒙本の祖本の誤れるものである。是れ其四。兩蒙文祖本の誤脱と推定すべきものも藏本により之を證すべからざるものあり。乃ち此祖本の誤脱は蒙譯原本又は之に近きものより轉寫の際に生じたるものであらう。是れ其五。尙ほ藏本無き所にして兩蒙本に衍入せるものあり。是れ亦蒙原本より兩蒙祖本に移寫の際に生じたるものでなくてはならぬ。是れ其六。兩蒙祖本は重校せられたる形迹を存してゐる。故に此祖本の底本の直ちに蒙本原譯本なりや否やは斷定し難い。是れ其七。露本は語學的に重訂されたりと認むべきものが字句上にも文體上にもある。露本上の異同は殿板上のものより多い。是れ其八。露本の誤寫は原譯より離るゝ事遠し。是れ其九。露本は更に藏本により參訂して誤訂せるもの文法的解釋を異にせるものがある。殿本の重校は單に語學的改訂に歸すべきものであるも、露本は別本を參照したるに由るものが多い。是れ其十。露本は固より京譯本でない、重訂本なるも即

て誤謬が多い。是れ其十一。以上の推論により系統表を作らば左の如くである。



以上ウエラア氏は専ら梵網經蒙文の兩本を精細に對校して推論せる所なるを以て固り大約首肯し得べく、又之を旁證するに難くない。乃ち、大正十二年の夏我が東京帝國大學圖書館にて大震災の爲め消失せし金字蒙文藏經は察哈爾の林丹汗より傳はりしものにして、康熙年間に刊行せられし殿板蒙藏の實に底本たりしものである。而して殿板蒙藏の編纂刊行は殿板番藏の編纂刊行と殆んど同時にして、その影響を受けたるものある事は余の嘗て指摘したる所である。金字經は固り蒙譯原稿本でなく、之より移寫したるものであつて、校正の痕を存したるも、蒙藏を完成したりと云へる林丹汗家より出で、林丹汗の親寫數行を存したるを以て云へば、殆んど是れ蒙譯原本なりと稱すべきである。

惜いかな今之を再び見ることを得ぬ。露藏本は今其詳を知るを得ざれ共、察哈爾より出たりと傳ふれば之を林丹汗本より分出せるものなるは想像に難くない。乃ちウエラア氏の推定せる如く殿本と露本とは兄弟本にして、其祖本の金字藏經なるを知り得る。兄弟兩本の内露本の番本により重校せる形迹はウエラア氏の指摘する所であるが、殿本も亦當に清朝殿板番藏により或は又明朝殿板にもよりて重訂せられしものあるべきは推察し得る。蓋し精審なる校勘の事一に後賢に俟つべきものがある。番蒙藏經諸本は諸國の儲うるもの多からず、學人の研究に資するに便ならず、惜しむべし。我國は輒近幸にも將來多く、番藏諸本は已に各官私大學に通く藏せられ、蒙藏は京都帝大に鈔本を、東洋文庫に殿本を儲うるに至つた。誠に嘉惠の後學に及ぶもの大である。好古の士此の嘉惠を空しくせざらん事希望の至りに堪えぬ。

(以上、石濱純太郎)

日清役支那外交史

矢野仁一著

東方文化學院京都研究所研究報告第九
菊版布裝七〇九頁、定價金五圓

本書發行後已に一年に垂んとし、今日までに滿洲史